

夕暮れどきの教室にふたりきり。

お互いを見つめる視線と距離。

オレンジ色に染まった室内で停止する時間。

……静寂が降りたところ、彼女は恵さんにふわっと微笑みかけた。

『先生のこと、呼んだの。シヨパンの「別れの曲」……わたしだって、わかった?』

すると、恵さんの返事は――。

「おもしろい?」

あ。

ドラマに集中していた俺に、恵裕次本人が話しかけてきた。

「ご、ごめんなさいっ」

慌ててテレビを消すと、彼は「べつに消すことないのに」と苦笑して、ジュースの入ったグ

ラスを片手に近づいてくる。

「このあとふたりの初めての濃厚なキスシーンだったんだよ」

俺の前にグラスをおいて、恵さんが横に座った。小首を傾げてにつこり笑い、いたずらっぽ

く肩を竦める。

俺はなんだか奇妙な気分になって、顔をしかめてしまった。だって、いまテレビのなかにい

た人が目の前にいて、あのアイドルとキスしたのが、この唇……。

恵さんは俺の心情をどう解釈したのか、

「まあ、拓人とはこれから何度もキスするわけだし、いいかなんて言う。今度は飛びあがって、身構えてしまった。」

「あの……恵さんは平気なんですか、相手が男で」

「ん？」

「なんで、その……ドラマの恋人役に、俺を指名したんですか」

恵さんは焦るでもとぼけるでもなく、しれっとこたえる。

「キミの顔が好きだったから」

俺はたっぷり数十秒かたまってしまった。

「か……顔が、って……失礼ですけど、恵さんて、男好きなんですか？」

「あはは、違うよ。俺は結婚してるしね？」

「別居中みたいですけどね……」

じろ、と見返してきた恵さん。俺は視線をつうとそっぽに流す。

ぎこちない沈黙を、恵さんの咳払いが、ゴホン、と打ち消した。

「……なるほどね。拓人がきた理由がわかったよ。同性愛のドラマにどうして俺が出演することを決めたのか、キミを指名したのか、理解できなかったんだね」

俺が無言で頷くと、恵さんはテーブルのうえにあつた煙草^{たばこ}をとって火をつける。なに気ない

仕草なのに、その指先のかたちと繊細な動きに惹かれて、思わず息を呑んだ。

テレビや雑誌で見ていた恵さんの鋭い目元がすうっと細くなり、長い睫毛が空気を撫でる。

……こんなきつかけがなければ、この人とうとうしてふたりで話すこともなかった。

見惚れていたら、お互いの視線が音もなく重なって絡み合った。あ、と意識して俺が俯いた拍子に、彼の唇から苦笑が洩れる。

「俺はどんな役でも嫌だとは思わないよ。演じることで役の人間の心を探究できるのが、この仕事の楽しさだと思ってるからね。変な役なら尚更楽しい。自分と似てる役のほうが、おもしろくないかもしれないな」

「演じる、楽しさ……?」

「拓人は役柄が、ゲイだから無理」としか考えてなかったんじゃないか?」

刹那、冷たい戦慄が走った。凶星だ。恵さんの言うとおり、俺は単純にゲイを毛嫌いしていただけで、それ以上でも以下でもなかった。

くちごもる俺を一瞥して、恵さんは煙草の煙をやんわり吐く。

「いいよ。なら、拓人がゲイを嫌う理由を教えてくださいな。納得できたら、俺もキミを誘うのはやめるよ。俺は同性愛もひとつの恋愛だと思うな。場合によっては、男女の恋愛より辛いかもしれない。そんな恋愛、俺は演じてみたいよ」

同性愛もひとつの恋愛。男女の恋愛より辛いかもしれない。

……言葉がでてこなかった。恵さんは俺の感情も否定する前に理解しようとしてくれているけど、自分の軽率さに気づきたいまは、責められている気分だったからだ。

同性愛の恋愛の痛みなんて、全然想像していなかった。

「人間はみんな同じじゃないからいいんだよ、拓人」

恵さんの言葉が、俺自身のちっぽけさを明確にする。

唇を噛んで言葉を殺した。悔しかった。自分がばかすぎて、情けなくて。こんなところまで乗りこんできて愚かさ^{おろかさ}を晒したのかと思ったら、余計にいたたまれなくなってきた。

「ごめんなさい……」

呆^{あき}れられてしまっただろうか。不安になって顔をあげると、恵さんは煙草を唇から離して微笑み返してくれる。俺の心に再び疑問が浮かんた。

「恵さん、俺みたいなガキを、どうして相手役なんかに、」

「言っただしよう、顔が好きだからだよ」

「でも、幻滅してもういやになったんじゃないですか？」
にんまりと悪そうな顔になった恵さんが、右手で顎^{あご}を擦^{こす}りだす。

「な、なんですか、その顔……」

「いんや。なんてこたえようかなあと思っただけ……」

……ぬつ。なにそれ。

「拓人を初めて見たのは、街のビルにあった大きな看板だったよ。黒いタートルネックの裾を^{すそ}咥^{くわ}えて、上目づかいで睨^{にら}んでるやつ」

ああ、初めてファッション誌の表紙になった写真だ。

忘れもしない。雑誌の顔になるほど成長できたのが嬉しくて、それまで支えてくれた人たちに恩を返すためにも、気合を入れて挑んだ一枚。

「それが……？」

「あの瞳に惹かれたんだよ。人の心を見透かすような、あの強い瞳に。……で、今回の仕事を依頼されてから思った。いまのキミのモデルとしてのポジションを考えても、ドラマにできるのはいいタイミグなんじゃないか、とね。それで俺も男だし、キスもベッドシーンもあるなら好みの子がいいなあ、と」

キスとかは、ともかく……俺はまた驚いた。

「恵さん、俺のこと気にとめてくれてたんですか？」

「知らない子を指名するわけないだろ」

嘘^{うそ}みたいだ。〃惹^{かんが}かれた〃 って？ 恵さんが？

狼狽^{うろた}える俺を感慨^{かんがい}深げに眺めながら、恵さんは俺の後頭部^{てのひら}に右の掌をのばしてそつと覆い、

「ずっと前から好きだったよ。今日会いにきてくれたのも嬉しかった」

と、言ってくれた。

……胸がざわざわする。心が幸福感に騒ぐ。ますますこの喜びを返さなくては、と俺も衝動的に告白した。

「同じです。俺も、恵さんに憧れてましたっ」

恵さんは、お、というふうに目をまるめる。

「そうなの？」

「はい。身長が高くて目がきれいで、指も細長くて、全体的にスマートなのに適度に筋肉がついてて、恵さんの身体のラインに憧れてたんです」

「からだ？」

「テレビとか雑誌も、たまに見てました。モデルとして恵さんのボディラインが気になったのもあるけど、でも、単純に顔とかも、好きで……」

は。

し、しまった。調子に乗ってしゃべりすぎた。しかも身体と顔が好きって、恵さんが俺にくれたのより強烈な告白じゃないか。

真っ赤になってちぢこまったら、にやにや笑って覗きこまれた。

「じゃあ、ベッドシーンも問題なくできるね」

あぐ、とくちを噤む。吹きだした恵さんは、笑いながら俺の後頭部にあった手でさり気なく髪を撫でて、さらりと離す。

心地いい温度と、安堵感。あんどかん

恥ずかしかったけど、くちから無意識に告白の言葉がでるぐらい、この人を好きだったのは本当だ。この手に触れられるなら嫌じゃないかもしれない。それどころかきれいなかたちとぬくもりに興奮しそうだ。

ドラマか……。

「恵さん。俺、演技にも自信がないんです。学校の学芸会で『三匹のこぶた』をやったときも木の家役だったし、演じた経験はないも同然なんですよ」

真面目にうちあげたのに、「あつはは！」と大笑いされた。

「木の家？」

「はい。家の壁の絵を描いたでかい板を持って、紙の茶色い帽子被って、何人かの仲間と、ぼーっと立ってるだけ。セリフもない地味な役です」

「かわいい」

「からかわないでください」

恵さんの肩先をぶってやったけど、

「平気だよ。拓人はやると決めたことには熱心な子だって聞いている。——モデルだって、最初はやりたかったわけじゃないんだろう？」

と、返された。